

令和 5 年 6 月 3 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00098

研究課題名（和文）中国古代道家思想の生成論と儒家の倫理学説に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Generative Theory of Ancient Chinese Taoist Thought and Confucian Ethical Doctrine

研究代表者

西 信康（NISHI, NOBUYASU）

三重大学・人文学部・特任准教授（教育担当）

研究者番号：30571062

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：主な成果は次の二件。（1）『孟子』に見える楊墨批判を対象とし、その倫理学説としての特徴を明らかにした。具体的には、孟子は、利益の有無を行為の妥当性をはかる基準とする思考法に反対し、また、手段としての妥当性に倫理的行為の価値を認める思考法に反対していることを明らかにした。（2）『荀子』の性悪説を対象とし、その倫理学説としての特徴を明らかにした。具体的には、先ず、『荀子』における「悪」の意味内容について、『荀子』内部の用例を再検討することで明らかにした。その上で、荀子の倫理学説は、人の善悪の可能性を始原の資質に求める思考法を克服することに、その特徴があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ここ30年来、我が国においては、『孟子』や『荀子』といった著名な思想文献についてさえ、専門的な研究成果が発表されることはほとんど希な状況にある。従って、本研究成果の学術的および社会的意義は、先ず何よりも、『孟子』と『荀子』といった、中国思想研究の中心的役割を担う重要文献を研究対象としたことにある。そして、これに関する我が国の豊富な先行研究を批判的に継承することで、新たな研究課題を発見し、研究の停滞状況を打開する契機を提供したことにある。

研究成果の概要（英文）：Two specific results of this research project are as follows.(1) We targeted the criticism against Yangzi and Mozi that appear in the Mencius and clarified their characteristics as ethical theories. Specifically, it became clear that Mencius opposes the way of thinking that takes the existence of benefit as the criterion to measure the validity of an action, and also opposes the way of thinking that recognizes the value of an ethical action in its validity as a means to an end. (2) This research project focuses on the human nature theory of the "Jingzi" and clarifies its characteristics as an ethical doctrine. This study reveals that the ethical doctrine of Jung Tzu is characterized by its overcoming the way of thinking that seeks the possibility of good or evil in a person's primordial qualities.

研究分野：中国古代思想

キーワード：儒家思想 人性論 墨家 道家 養生思想

1. 研究開始当初の背景

ここ五十年来、古代中国思想研究は変革期にあると言われている。その理由は、新出土文字資料の発見が相次ぎ、史料が飛躍的に増加したことにある。具体的には、一九七二年の『銀雀山漢墓竹簡』や一九七三年の『馬王堆漢墓帛書』の発見から、一九七五年の『睡地虎秦墓竹簡』や一九九三年の『郭店楚簡』の発見を経て、そして『上海博物館蔵戦国楚竹書』、『清華大学蔵戦国竹簡』、『北京大学蔵西漢竹書』などが公開されたことを指している。出土資料の発見は今日なお続いており、これら出土資料の分析が進むことで、伝世文献を対象とした従来の研究成果について、これを再検討する試みが目下のところ進行中である。

2. 研究の目的

本研究課題は、万物の生成変化に関する中国古代道家思想の生成論と、人性論を含む儒家の倫理学説とを対象とする。道家の生成論を儒家の倫理学説に対する存在論的基礎を提供するものと想定し、儒道二学派の思想的形成過程とその思想的交渉の具体的様相を解明する。

3. 研究の方法

本研究課題は、世代を超えて今日まで伝わる伝世文献と、新たに発見された出土資料とを一次資料とする。儒家の倫理学説における解釈史上の諸問題を実証的に解決するために、新出土資料を効果的に活用しながら、各資料の新解釈の提示のみならず、研究者の視点を更新する解釈学的批判に取り組む。

4. 研究成果

本研究課題では、以下の二つの成果が得られた。

(1) 『荀子』の倫理学説の研究

本研究は、『荀子』の性悪説を対象とした。まず、近代日本の研究成果を中心に、その研究状況の把握と分析とを進めた。その結果、次のような知見が得られた。(一)『荀子』の性悪説に関する研究では、性悪説の論理的矛盾を認めることで、性悪説の局所的な論理的整合性ではなく、人間の本性に対する荀子の基本思想の解明が目指された。これにより、『荀子』における人間の本性とは、善悪いずれへの発展の可能性を有する「中立的」「中性的」なものとする解釈が得られたこと。(二)『荀子』の性悪説に関する研究では、性悪説の矛盾を根拠として、荀子の思想的形成過程の解明が目指され、これにより荀子の思想形成の過程が探求されたこと。研究状況に関する以上の知見を踏まえ、本研究では次の問題点を指摘した。思想の形成過程や文献の編纂過程の解明を目的とし、テキストに認められる内容上の矛盾に着目することは、学術的に正当な問題設定でありかつ妥当な方法論である。一方で、そうした研究は、「矛盾」の根本的な解決には繋がらず、むしろ矛盾の固定化を促進し、その根本原因の究明を先送りすることに繋がる。このことは、荀子の想定する人間の本性を「中立的」「中性的」とする説明についても同様に指摘できる。たとえその説明が『荀子』の思想体系との関連において妥当と判定されたとしても、翻って「人の性は悪なり」という記載に立ち返るとき、それを人間の本性が中性的であることを意味する、と説明して納得することは困難であることに変わりはない。以上の分析結果を踏まえ、本研究では、性悪説に関する先行研究に対し、「矛盾を認める我々の判断の妥当性を問い直す」ことを提案した。その上で、新出土資料をも検証対象としながら、矛盾、本性(性)、善悪等の意味を反省し、性悪説に関する新たな解釈と、その思想的意義に関する新たな見解を提示した。その成果は、「矛盾と合理 『荀子』性悪説の解釈学的批判」として、学術雑誌『中国 社会と文化』(第34号、p.102-p.120、2019年7月)に公開された。

(2) 『孟子』の倫理学説に関する分析

『孟子』に見える楊墨批判に着目し、その倫理学説の特徴を明らかにした。本研究ではまず、兼愛説と為我説とについて、『孟子』『墨子』『呂氏春秋』等の記載を再検討した。その結果、それら記載には、利益の有無を基準とする思考様式が共通して認められることを指摘した。次いで、「利」および利益や効率に対する孟子の問題意識を分析した。その結果、戦争の抑止に関する『孟子』の記載には、利益の獲得と危害の回避とが行動原理として習慣化することは、目的の是非を反省する契機を欠くこと、またかかる思考様式では、他者に対する危害行為を抑止する行動原理には発達し得ない、とする問題意識が確認できることを指摘した。次いで、四端説に関する記載や、「愛無差等」の語が見える記載を分析した。その結果、「ジュツ惕惻隠」「～の所以に非ざるなり」「忍びざる」「爲に～するに非ず」「中心、面目に達す」「誠」といった表現には、利益の有無に対する考慮とは全く異なる行動原理が追求されている様相について、検討を加えた。本研究は更に、「身」「愛」「養」「利」といった用語に着目し、『孟子』の記載を再検討した。その結果、これら用語が兼愛説や為我説のみならず、『孟子』においても、その基本思想を表明する重要概念となっていることを指摘し、そこには、自己および他者について、これを「我」

「身」の一語で一括せず、人間の尊厳の所在を根本から問い直す思想が認められることを指摘した。以上の知見から、楊墨批判の要と目される「無父」「無君」という語は、局所的な社会制度の問題としてではなく、人間の尊厳に関する孟子の基本思想との関連でこれを解釈すべき、との見解を提示した。

また、上記研究の一環として、儒家の思想形成に多大な影響を与えた墨家の思想動向について調査した。特に注目したのは、運命や宿命に関する思想である。調査の結果、墨家において運命論や宿命論が思想的主題となったのは、それらが倫理的行為の意義や、倫理の実践主体となることの効用について、これを疑わせる契機になることが懸念されたため、との理解を得た。本研究は、この理解にもとづき、『墨子』以外の諸文献にまで調査対象を広げ、運命論および宿命論と、倫理学説との関係を検証した。その結果、新出土資料である上海博物館蔵戦国楚竹書『鬼神之明』を重要文献と見なし、その表現形式や思想内容に関する分析を進めた。先行研究によれば、当文献は、鬼神に対する懐疑を表明していることに、その思想的特徴が認められる。これに対し、本研究では、以下のような知見を得た。懐疑を表明することは表現技法の一つとして、思想的主題とはこれを分けて捉える視点が必要であること。懐疑の表明は直ちに信仰の放棄や思想の否定と同一視されるべきではなく、類似表現が認められる他文献の事例からしても、かかる前提理解は再検討の余地があること。懐疑を直視して表明し、これをみずから再解釈することは、信仰の実践過程の一部であり、思想の洗練化に対しても不可欠の契機と位置づけられていた可能性が想定されるべきこと。以上の研究成果は、「懐疑と信仰 上海博物館蔵戦国楚竹書『鬼神之明』に関する考察」と題し、日本中国学会第73回大会にて口頭発表された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 西信康	4. 巻 48
2. 論文標題 孟子の楊墨批判とその思想	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『中国哲学』	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西信康	4. 巻 34
2. 論文標題 矛盾と合理 『荀子』性悪説の解釈学的批判	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国 社会と文化	6. 最初と最後の頁 102-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西信康
2. 発表標題 懐疑と信仰 上海博物館蔵戦国楚竹書『鬼神之明』に関する考察
3. 学会等名 日本中国学会第73回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西信康
2. 発表標題 上海博物館蔵戦国楚竹書『恆先』について
3. 学会等名 日本道教学会第72回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西信康
2. 発表標題 哲学と処世訓 郭店楚簡『太一生水』からみる古代道家思想
3. 学会等名 三重哲学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西信康
2. 発表標題 『荀子』の性悪説と礼義起源論
3. 学会等名 北海道大学中国哲学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関